

第2回 令和の魅力と活力ある県立高校のあり方検討委員会 議事概要

1 日 時 令和3年11月2日(火) 13:00~15:00

2 場 所 富山県民会館 401号室

3 委員出席者 金岡 克己 牧田 和樹 伊東 潤一郎 稲田 裕彦
尾畑 納子 河上 めぐみ 近藤 智久 品川 祐一郎
能作 千春 堀井 鉄也 本江 孝一 本島 直美

4 会議の要旨

司会が開会を宣した。

議事事項

○ 職業系専門学科の現状と今後のあり方について

事務局から資料に基づき、本会における検討事項の確認と検討に当たって参考とする事柄などについて説明した。

(委員長)

次第では最初に職業科全体について、ご意見を伺い、そのあと個別にということだが、全般、普通科等の関係その他、何かご意見はあるか。個別の学科のお話を聞いた後、ご意見が出てくると思うので、これを最後に回すことも考えたいと思う。

この時点でご意見がないようなので、まずは個別の職業科の内容について、ご意見をいただき、それを踏まえて全体に戻ってくるという形にさせていただければと思う。

最初に農業科について、何かご意見あればご発言いただきたい。

(委員)

中央農業高校の学校評議委員を、数年間やっており、学校とは年に何回も、情報をいただいたり、生徒さんと会ったりすることが多い。私自身は、普通科を卒業して、農業ではない大学で勉強をして就農しているので、高校の時に、農業という職業に携わる子ども達の学びを見ると、すごく素晴らしい取り組み、挑戦、学びをしていると思う。

資料に特色などが書かれているが、農業科の入学志願者が少なくなっている。農業高校としては、実際に地域に入り、担い手になる人の踏み台を作りたいということで、専門の農業の勉強をしたり、地域の人と携わったりしていると思うが、農業高校を志す人が少ないのも、社会に出て、農業という仕事を志す人が少ないのも同じだという状況を現場で感じている。どうやったら、農業に関心を持ってもらい、入学志願者を増やせるかと思う。

もう少し広げて考えると、農業は、たくさんの人、食べている皆さんに携わる、食料生産という社会の中の大事な部門になっているが、なぜか農業高校は専門で学んでいて、そ

の他の人は、人ごとという距離感があるので、農業科を選んでもらえる魅力をどのようにして増やせるだろうかということ、ずっと一緒に高校と考えている。

一番は技術、最新の技術を取り入れた農業や、地元と根差したというのは大前提で、これにプラスして、世界に通ずる食料を日本で育てる。育てないなら、どこかの農地から頼ってくるというくらい、世界と直結している仕事、産業であるという位置取りを高校の時に、農業高校生に感じてもらえる機会がたくさんあったら良いと思う。

よく農業者と地元の農家で何か作ってみましたなどはあるが、これからは他の職業科とも必ず通ずる部分があると思う。作ったものを家庭で食べるまでに色々なマーケティングなり、ビジネスなりがあって、食べ物は全世界、皆さんに携わっているので、広い世界を農業高校生に高校にいて感じさせる体験を増やしてあげて欲しい。

中農がいい例で、寮があるが、そこは1年生は全寮制で寮に入る。あの寮の環境がとてもよく、最初に評議委員になった時に、県外の高校生が入ったり、短期で交流できたりしないのか聞いところ、それはまだ、できない、していないということだった。同じ高校生で、街で生きている高校生と、ああいうところで農業の勉強に携わっている高校生と一緒に意見を交わすことができると良い。すばらしいことをしているが、農業高校の中だけで勉強しては、本人たちはあんまりしていることの素晴らしさを感じる事が少なく、それが県外、異学科の子ども達や、食をビジネスとしている大人、世界、他の国の農業を学んでいる子ども達との交流、それくらい幅の広い、逆に農業高校で学ぶと専門性を突き詰めるというよりは、農業という仕事の幅広さを知るという方向性が体感できる特色もここに、入ったらいいと思っている。

職業科からは外れてしまうかもしれないが、今、農業の現場も一緒に、農業をしている人を増やすには、担い手が不足している。ここを増やすには、農家さんをどれだけ育てるかではなく、業種の違うところから関心を持って入ってきてもらう。その入口を、もっともっと広げれば、広がる可能性は少ないと思っていて、現場で担い手が少ない、それでは食べているみんなに伝えて、興味を持ってもらうところから。

高校も、できれば農業高校に行った子が、農業のことを勉強するというよりは、富山の高校生が、農業というか食料生産という仕事が人間のどこかにはあって、そういうことを学べる機会を、高校全体の中でも作ってもらえたら良い。この農業科を卒業して、農業に就職している人の少ない現状がある。私も食べる側に立って消費地を見て、農業をしようと思った。今、新規で就農してくる人は、そういう人ばかりなので、ぜひ高校生のうちから、農業という職業があるよという種をまいてもらいたい。これは何か職業科全体に、水産という漁業もあるし、ものづくりもある。私は普通科だったので、あまりどれも特化して勉強してこなかったし、する機会もあまり今振り返ると、なかったと思う。職業科、それも同世代が専門的に学んでいることを知る機会が、高校時代にあったら、もしかしてもっと刺激を受けていたかもしれないなと思うので、多くの高校生に、農業という仕事の職業の種まきをしたい、して欲しいという思いが、農業者としてはある。

(委員)

今、中央農業の話が出たが、自分の体験として、親元を離れて寮生活をしたことがある。親元を離れての生活はとても不安だらけだった。全てのことを自分でしなくてはいけない大変さもあり、今まで、親に甘えていた自分に気づかされた。親代わりである寮母に怒られたことも、熱を出してお世話になったことも、とてもいい体験だった。

長男が中学校3年生のときに、家が農家であることもあり、中央農業高校へ行くことを勧められた。農業や畜産を学び、生き物に関われること、親元を離れて寮生活を送れることが、自分の体験と重なり、ぜひということ、子どもの背中を押した。寮生活は自立をとられる場所であり、人として成長できるところでもある。子どもにとって、この体験は貴重なことだと思う。県内には寮がある高校が少ない。ぜひ、寮がある高校が増えて欲しいと思う。

(委員長)

今日ご欠席の方で一人、この農業科について、ご意見をいただいているそうなので、事務局の方からご紹介をお願いしたい。

(委員)

農業科について、イメージチェンジが必要。農業に生徒も親世代もあまり良いイメージを持っていないのではないかと。学校名や学科名の変更も検討すべきではないかと。

肉体労働以外の部分、企業や大学との連携、先端技術の活用、バイオに関する研究、食のブランドビジネス、経営者育成などに焦点を当て、成長産業に関わる学校・学科としての魅力発信をホームページやパンフレット、オープンハイスクールではどうか。

また企業や県の人材と施設を活用し、開発研究の経験を増やし、高校卒業後、農学部へ進学するような専門家を育てるのもいい。

そのような進路状況を魅力として、しっかり生徒や保護者に伝わるようにする。作業ばかりでなく教室での授業や学校行事等での、生徒の笑顔など、楽しい学校生活が伝わるパンフレットにしてはどうか。

寮、寄宿舎での生活は、プライバシーがなくなると考え、避ける生徒が多い。寮、寄宿舎の利用を、1年次も希望制にしてはどうか。

(委員長)

続いて水産科の方、どなたかご意見を賜りたい。

(委員長)

ご意見がないようなので、私から問題提起をさせていただきたいと思う。今朝ほど、いただいた資料を見ていて、自分なりに計算してみたが、各学科、7つある。令和2年3月の卒業生がどうされたかということが書いてある。

就職或いは進学ということで、注目したのは関連就職、関連進学を足すとどういうパー

センテージなのか。私が足してみたところ、農業科の令和2年3月が21.1%、水産科が22.4%。工業科が77.1%。商業科が50.5%。家庭科が45.4%。看護科が100%、そして福祉科が42.9%。こういうことで、農業科と水産科がもう20%の下の方に来ている。先ほど示された資料によれば、中学卒業生でこの農業科、水産科を希望されている方は、そこそこの数がいらっしゃる。そういう方々が3年間、この高校の課程で学ばれて、現実には、その先を選ぼうとされてない。これは結構重大な、問題ではないか。特にこの水産科は、平成26年の時はまだ40.4%だったが、ここ数年で、22.4%にまで急落している。従って職業科のあり方ということを考える場合に、私からの問題提起だが、せっかく、中学卒業時は希望していた方々が、実際3年間勉強してみたら、5人に1人しかその専門に行かないという事情というのは一体どこに問題があるのか、或いはその業界が悪いのか、教えている内容が悪いのか。今ほどもお三方から意見があったが、特にこの農業科と水産科の問題というのは、5人に1人しか関連就職、関連進学されていないので、非常に重要な問題としてとらえていく必要があるのではないかと。他の学科は、少なくとも40%以上の方がそこに進んでいらっしゃるし、工業科は70数パーセントあるので、問題は少ないのではないと思うが、農業、水産については、合わせて、どういう形で捉えていくべきなのかということ、問題提起させていただきたいと思う。

各方面からの意見要望も、まとめて書いていただいたものは、恐らくは、農業団体、水産団体、そしてまた工業団体の受け入れ側のご意見がここに書いてあるのだろうと思う。8割の、そこに進学した生徒達が、十分な希望を持って勉強してないということは、非常に大きな損失ではないかということで、定員の問題も含めて、農業科、水産科については議論していく必要がある。

それから、今ほどお三方からもお話があったが、農業は、非常に基幹産業で重要なのだが、日本は恵まれ過ぎていて、いつの間にかそういう、ベーシックなサービスに誰も目を向けなくて、放っておいても電気、ガス、水道が来る、食品も勝手に来るというような形で、そういうものに興味を持たない人達が非常に増えていることであると、まさにお話のあった通り、食、農業というのはいかに大切なのかを伝えてくことと同時に、歴史的に見ると、戦後、農地改革等が行われて、小さな農業スタイルに日本はなっている。欧米はじめ、大規模農業というイメージが全くないので、労働集約型で、ただ何か畑を、水田を耕し、畑を耕して小規模で行っているというイメージが染みついてしまっている。現実にはもっと大規模化して、魅力ある形に変えていくべきで、農業は非常に重要視されている。こういう歴史的背景にも、踏み込んでいく必要があるだろうというように思う。

(委員)

まさにおっしゃる通り農業科、水産科については2割しか、関連産業に勤めない。しかし、この工業科についても、7割というデータが出ているが、一次就職は関連産業に行くが、二次就職は関連産業に行かない子ども達もいるので、ここの一次就職の段階のデータというのは、あまり頼れないかというように実は思っている。今のお話に関連するが、子ども達は、現実、行きたい高校というか、行きたい職業科に本当に進学しているのかどう

かという問題が一番大きいと思っている。というのも、最近どうかかわからないが、私達の子どもが、高校進学する時には、県内共通模試みたいなものを受けて、その偏差値で、「お宅のお子さんの点数だったら、この辺ですよ。」と言われて、この普職比率の問題と関係していくのだが、普通科に引っかかりそうになかったので、「職業科行きなさい。」と言って、行くわけだ。我が社は工業高校から結構採っているが、そういう子ども達に必ず聞く。「君は、本当に土木をやりたくて、土木科に進んだのか。」というと、「いや違います。」と異口同音に答える。そういう現状があって、「じゃあ何で進んだのか。」と聞くと、「もうここしか行くところがなかったのだから」というような話だ。これは全てではないと思うが、当たらずしも遠からずの現状だろうと思っている。ここをやはり切り込まないと、今の職業科教育というか、職業科の構成など、そんなことをいくら考えても、ほとんど効果がないのではないかと思っている。何でそうなったかという原因はいくつかあると思う。まず一つは、高校進学時の学力格差が、やはり大きくなりすぎているという課題はあると思っている。

それからもう一つ、先ほど申し上げたが、単線型の教育制度を敷いている我が国において、果たして中学校を卒業して、高校進学時に自分のキャリアを決めさせるということが、適当かどうかという問題もあると思う。これは釈迦に説法だが、単線型の教育は、基本的には色々なことを広く学びきって自分は何をしたいかを決めることが、単線型のスタンダードの姿で、アメリカがまさにその先を行っている。そういったことを考えた時に、中学校を卒業する時に、「俺は土木技術者になるんだ。」とか、「建築技術者になるんだ。」とか、「農業で生きていくんだ。」というように本当に決め切れる子ども達が何人、どれぐらいの割合でいるのかを考えると、そこにも一つ問題があるのではないか。

それから、三つ目の課題として、職業科に求める技術。ちょっと言葉の定義が曖昧だが、技術者になって欲しいのか、技能者になって欲しいのかという問題はあると思う。社会構造として、技術を究める人と、技能を極める人の両方が存在する。

ところが、今の職業科はどっちを目指すのかということが実はあまりはっきりしていない。逆を言うと、工業高校を出た子が、本当に技術者として使えるようなレベルにあるかということ、そうではない。そうなる、本当に中途半端になっていくわけで、その問題がまずある。

それから最後は、産業構造の変化があると思っている。同じ農業でも、先ほど言われたように改革が進んで、今でも農業はどんどん変わりつつある。いわゆる大規模農業に、会社で農業をやるような時代になってしまう。そういう産業構造の変化に、果たして職業科はついていっているかという、つまりそういう産業が求める人材を職業科が輩出できているかということもあると思う。

諸々申し上げたが、このようなことが、根本的な原因としてあると思っているので、この辺をきっちり見据えて、高校の職業科の設置を考えていかないといけない。結局、何か形は変わった、先ほど意見があったように、何かあったら名前を変えたらどうか、それも一つかもしれないが、そういうマイナーチェンジでは、おそらく、子ども達の幸せは、やってこないのではないかというように考える。

(委員長)

それでは次に工業科、今、大変大きな、全体のお話いただいたので、これからも科ごとにお話していただくが、当然今の話のように、全体に関わるお話でも構わない。

工業科、ぜひとも、ものづくりに携わっている企業の方、どなたかご発言いただければありがたいが、いかがか。

(委員)

私の会社が所属している溶接協会のお話をさせていただくと、今、はっきり申し上げて、中小企業にとって高校生の卒業生を採用したいという要望がたくさんあるが、全く採れていないことが、各中小企業の本音だ。

その中で、大企業に、子ども達も行きたいという思いがある中で、我々の業界としては、高校とタイアップをしていながら、各種大会を開催したり、いろんな出前出張したり企画していながら、我々のこの 3K と呼ばれるイメージを払拭していながら溶接や、ものづくりの人間を育てていきたいというような挑戦を我々の業界でしている。

その中で、高校生が今、何と問題になっているかと考えると、やはり外国人労働者の採用である。高校生か外国人労働者かという、中小企業にとって、やはり外国人の研修生を採るということが一つの選択肢になっている。はっきり申し上げると、高校生を採用するよりも、外国人労働者を採用する方が、今実際高い。しかし、労働力を計算する上では、どうしても高校生の採用ができないという以上、その外国人労働者に頼らざるをえないというのが、日本全国でそのような、現状があるということだけは皆さんご理解いただきたいと思う。

その中で、やはり今、富山県も取り組んでいる、17 歳の挑戦のようなものを、もう少し、インターンシップのような形で企業に入り込んだ取り組みをされてはいかがかというように思っている。やはり 1 日 2 日程度、現場で見学して多少のものを触っても、ものづくりの楽しさというものも、なかなか分からないというのが本音であるし、やはり、例えば 1 週間、2 週間という形で、企業にお預けするというのも一つのこれからの子ども達の成長、そして職業を選択する上での、一つの糧になるのではないかというように思っている。ぜひそういった意味では、企業は本当に高校生を採用したいというような思いがあるということだけはまず、高校を企画する上では、ぜひ覚えておいていただきたいと思っている。

(委員)

当社は産業の背景を子ども達に知っていただきたいということで、産業観光に力を入れている。現状、コロナで来場者数は年間 8 万人ぐらいだがコロナ前で 13 万人、教育としてお越しになる方も多い。現状では、高校生や大学生さんの受入希望が増えており、一部では、半年程度の期間、教育の一環で、弊社の持っている課題の中から学生達が興味のある分野を選択していただいて、その選択した分野に関し、スタッフがマンツーマンで、課題について一緒に研究をするというような取り組みも行っている。

そこに至った経緯としては、やはり保育園児や幼稚園児、小学生、中学生、高校生それ

それぞれによって、教育の仕方というのも全く異なってくるし、興味がある分野も変わってくるというのを、5年間産業観光を通して最近つくづく感じているところである。当社は、ものづくり・販売が本業ではあるが観光事業であったり、或いは最近ブライダル事業も始めていたり、社屋の中では飲食事業も行ってたり、最近では医療分野への進出も行ってっているので、幅広い業種の中で子ども達に課題の選択をしていただいている。

最近、学生の中で興味がある分野を聞くと、専門的に例えば医療や、工業を専攻されている学生の中でも、飲食や、農業、水産にすごく興味を持たれる学生が増えているような気がしている。皆さん当社の飲食事業に対して興味を持っていただいている。その中で、ただ、食だけではなく、その食と料理人であったり、それにまつわる器であったり、幅広く総合的に勉強していただくことで、夢を持っていただけるような気がしている。日本で、特にこの富山県がすごく優れているものづくり産業であったり、或いは白エビだったりホテルイカであったり、他には負けないものが、海外でどう調理されていて、提供され、日本国内でどのように振る舞われているのかを、五感でもっと刺激させるようなプログラムがあったらよいのではないかと思った。当社の従業員も、ものづくりが本業ではありながら、星つきのレストランをリサーチしたり、或いは海外のホテルを研究したり、いろいろ刺激させるようなことを行っていて、これは学生さんにもやはり通ずるところがあるのかというような思いがある。いいものを見たり、すばらしい人と出会う機会が何よりもの学びにつながると思っている。

工業科のところかというと、機械系や電気・電子系というような学科名称の方を見させていただいた時に、実際この学科で何が学べるのだろうかというのが、私自身ピンとこなくてわからなかった。多分、中学生さんも、この機械系などの区分けを見ても、おそらくピンとこない方がほとんどなのではないかと正直思った。高校に入られてから将来を決めるというのは、個人的にはまだまだ早いような気がしていて、本当に色々なことに興味がある。その興味を、学生さんにいかに引き出してもらおうかというところがより重要になってきているのではないかと思っている。

私自身も、高校では英語にすごく興味があり、その後、大学では心理学に興味があって心理学を学んで、その後、雑誌の編集者になり、そして今、鋳物業という、いろいろ興味が転々とした。高校時代に将来を決めるというのはなかなか過酷で、それよりも、色々ないい人に触れて、いいものに触れて、国外を見て、国内の広い場所を見て、五感をくすぐるプログラムを経験させることが大切ではないかと感じた。

(委員)

まず一つ目は何かと言えば、学校で学ぶことと、社会で必要とされていることには、すごく大きなギャップがあると認識している。高校生で、ここで例えば「職業科ですよ。」と言って、一番わかりやすいことが例えば、旋盤の実習をさせてもらっていることだ。高校で学んでくる旋盤の実習なんて社会に出てきて、結局役に立つことは、ほぼほぼ、ないと言っていいと思う。「どれだけ実習してきたの。」と聞いた時に、例えば1年間で毎週1時間ずつしたとしたら、毎週1時間だったら年間に30時間から40時間。30時間から40時

間を1週間に1回ずつしていたとすれば、旋盤の実習をした時間は多分だが、その半分の時間にも至らないわけだ。前の日の復習をして、前回したことの復習をして、実際使っているのは、そのうちの時間の半分だとすればもう4分の1だ。会社に入ったら、毎日8時間働いて、旋盤、それを毎日繰り返すのであれば、実際のところ2日分ほどにしかなくなってないというのが、現実的な話だ。教育の中身としての問題だが、そうなると何が起こってくるかと言ったら、会社に入った時に、楽しかったと思っていたものは全く楽しいものではなくなる。

例えば、資料にも書かれているように、3Dプリンターを活用した実習というものがあるが、3Dプリンターを活用して、「何か一つこんなものを作りますよ。」と言った時に、多分高校の時だったら好きなものを作れる。でも、会社に入ったら違う。好きなものを作れない。なぜかと言えば、利益を上げることが会社としての一つの責務であるから。そうすると、「こんなものを作りなさいよ。」という、別に好きなものでもないものを、それも、例えば、高校だったら、何日かかけて作っていいと言われるものを、例えばの話だが「先輩たちは1日で作ってきます。」と、「君は最低でも2日3日ぐらいで作きなさいよ。」ということになる。現状と学校で学んでいることが、工業科だけの子ども達を見ている時でも、大きく違っているということ。そこを例えば職業科なんかでもそうだが、違った形にしていかなければいけないと思う。

それともう一つは先ほど、外国人の話をされたが、多分外国人を雇われている会社の社長は、皆さん一緒だと思うが、高卒の方を採るよりも、外国人の同じくらの年の子を採用の方が、成長は、言葉は分からないが、明らかに早いし、一生懸命にやってくれるということも、もうみんな分かっている。

なぜかという、やはり逃げるところがいっぱいあるからだと思う。逃げるところがいっぱいあるという話、大事なところだと思うが、与えられたものを好きになる力がないと言ったら、すごく言い方は良くないのかもしれないが、働くとはどんなことなのかと言ったら、自分に与えられたものを好きになる力ではないか。先ほど、複線型の話をされたが、中学校を出て、例えばこういう職業に就きたいなどと色々話をしながら思うが、ヨーロッパあたりでは、一生懸命頑張って、「こんな仕事に就きたい。」と言って、努力をして、いつてみたら徒弟制度、弟子に入り、もちろん続かない子もいるが、やはり、そこで与えられたもの好きになっていく力があるから続けるのだというように思う。

そういうところ、もう少し魅力のある高校ではないが、今その場にいた時にそれを好きにしっかりなっていけるような、そういう教育の手法を取っていかない限りは、高校を出た子で、さっきもお話があった通り、定着率というものは上がっていかないと感じている。

あとは企業の方を使って、例えば製造業であればものづくりの魅力や、それから農業の魅力という、そういう魅力を伝える部分を、やはりもっともっとしてもらいたいというように感じている。

(委員長)

他にも製造業の方がいらっしゃるが、ここらで商業の方に移らせていただきたいと思う。

製造業の皆様でも、商業についてもご意見をいただければと思う。

(委員)

必ずしも商業科だけの話ではない話を申し上げたいと思うが、今、県の成長戦略会議の方で、やはり富山県は起業家が少ない、起業家が輩出される土壌に現状あまりなっていないのではないかと、またウェルビーイングという言葉も出てきたが、起業が少ない風土というお話が出ていたと思う。私も非常に納得させられた指摘だったが、やはりこの職業科の教育をご検討されるにあたって、最後は起業するという観点から、色々なことをご検討いただくのも、少し違った切り口だが一つの方法であると思う。これまでの皆様のご発言をすべて共感させていただいて伺っていたが、少し違った切り口でいうと、その起業家精神をどう、特にこの職業科の若者に伝えていくのかということだと思う。

もちろん色々な技術、技能の習得、それから商業科においても、様々な基礎知識の習得、これは必要条件として大切だと思うが、その先にある仕事をすることの意義づけ、意味づけ、またいわゆるビジネスの楽しさ、嬉しさ、またやはりその仕事をする目的というのは、自分の仕事を通じて社会の役に立つ、たくさんの人に喜んでもらう、そして社会の発展にも貢献していく、それを一人一人が主体的に、前回の会議でも内発的に自ら動機付ける、その目的、目標を自分で設定できる人材育成をお願いしたいと申し上げたが、やはりその起業家精神たるるところを、仕事を通じて社会の役に立つ、1人でも多くの人を幸せにする、ウェルビーイングを作っていくというところの本質的な部分を、ぜひ職業教育の中で、技能、技術の教育に加えて伝えていただくことをご検討いただきたいと思います。

そうすると色々なアイデアが出てくるし、色々なことを学ぼうと思えると思うし、先ほど目の前のことを好きになるという話があったが、やらされ感、義務感、ないしは強制される、自分が主体ではない取り組みというのは、どうしても「嫌だな、面倒だな、大変だな。」という感覚が先に立つので、その先にある仕事を通じて何を成し遂げるのか、自分の人生をどう考えるのかということも、ぜひカリキュラムの中に入れていただくと、関連就職率が低いなどの課題に対応して、先ほどから皆さんおっしゃっているようなものすごい志を持って日本に来ている外国人、そういう皆さんと対等以上に、富山県の若者もやっていただきたいと思います。

自分の目指すところ、また仕事を通じて、事業を通じて、ビジネスを通じて、何を成し遂げていくのか、まさに起業家精神的なものを、職業科に進まれる方も多く、ものづくりや安定した経営をする企業がたくさんある富山県の強みを生かす意味でも、進めていただきたい。

具体的にというところ、ぜひ我々民間企業を活用していただきたいと思いますし、先ほどお話があったインターンシップだとか、14歳の挑戦に加えて17歳の挑戦があってもいいと思う。私どもも自動車整備士という工業高校を卒業した社員が約4割いるが、採用面接で14歳の挑戦で自動車整備工場に行って、それ以来目指そうと決めたという学生が今年採用したうち3人いた。もちろん教室で技術、技能を学ぶ、知識を学ぶ、商業の簿記や会計のような知識を学ぶこともやった上で、自分の将来の職業観、人生観も考えてもらうような、ないしは

学んでもらえるような、カリキュラムを工夫していただければと思う。

(委員長)

これまで企業経営に携わる方から多く、ご意見をいただいたが、このあたりでこの商業科に限らず、教育界に携わっている方からご発言あれば、承りたいと思う。

(委員)

今ほど企業の視点から、たくさんの方の話を聞かせていただいた。

二点申し上げますと、一点目は、キャリア教育について、子ども達が職業をどのように捉えて、将来どういう仕事をしていくか、興味関心がどこにあるか、適性を判断していくか、ということで随分、色々な体験をしている。ただそれが、自分の適性を自分で見極めてしまうことに少し偏りがあるのではないかと私は感じている。それは、今もお話があったが、与えられたものを好きになる力というか、会社で仕事をするということは、そこで仕事をして、給料をいただくので、初めから一人前にはならないが、そこで少しでも会社のためになる、あるいは会社を通じて人のためになる、というようなところに、どんな仕事もずっと先に結びついているような職業観が非常に大切というように思う。

それは、一つは適応力ということかもしれない。高校までの間に、様々な職業、色々なことを勉強するが、その一つの経験がその職業はこういうものと決めつけるようになると、かえって一生懸命やっているキャリア教育が仇になることもあるのではないかと感じることもある。

インターンシップだが、ものづくりの楽しさを感じられるまでの経験が、どれぐらいの期間で得られるのか。高校生のうちに全てできるとは、到底、思えない。そうするとやはり想像力というか、自分が一生、もちろん途中で変わるかもしれないが、とりあえずその時点で、こういう仕事に携わろうというような思いを持つのは、もう少し先のことではないかと思う。その先には、おそらく生徒たちが想定できないことがたくさんある。そういう想定できないことを一つ一つやって、クリアして、そういう中で一人前に近づいていくのだろうと、そういうイメージを、子ども達には持ってもらいたいという気もしている。

もう一点、一次産業、特に農業は、どちらかというとな経営規模が小さいというか、会社に勤めるというよりも、いきなり経営者になる可能性もあるお仕事だと感じている。こういう仕事を、例えば中学生が、農業高校を選ぶときに、どこまで想定できるかというとなかなか難しいものがあると私は感じている。

農業高校に学ぶ生徒が必ずしも農業の子弟ではない。ほとんどが農業を知らないが、何の問題もないと思う。食料を生産する農業という仕事がいかに尊いものであるかを知り、生き物を育てることが人間教育になっていると思っている。そういった意味では、関連就職が低いことについては、求人と、子ども達が思い描いているもののマッチングは、なかなか難しいものがあるのではないかと思う。

特に本県は、水稻が中心で、大規模化を目指しているが、他県では、水稻だけではなくて、花卉であるとか果樹であるとか、色々なものを、生活できるだけの生産をやっている。

そういう農業の世界だとか、他にもこういう道があることを知らせるのは、高校の教育だけではないと感じている。

(委員長)

残るのは、家庭科、看護科、福祉科の三つである。特に看護と福祉はかなり関係もあり、事務局の皆様には大変だが、ここは色々なマクロのご意見をたくさんいただいているので、家庭科、看護科、福祉科、三つ合わせて、どれについても結構なので、ご意見をいただきたい。

(委員)

今までのお話を伺っていると、義務教育の責任が少しあるのかと思いながら、「もっとこんなふうになったり、あんなふうになりたい。」という夢を小さい時から持たせて、それを持続させることをもっと教育の中に活かさなければならぬと思っている。

家庭科関連教育ということでの発言を求められたと思うが、基本的にこれが作られた時代の職業教育には、この家庭科というのも入っていた。名前が、家庭のプロフェッショナルという、本当は今、それがすごく大事だと思うが、産業教育の中での家庭科教育が時代的に、その名称が合わなくなってきていると思う。ただ、やはり今の子ども達という言い方が良いかどうかわからないが、生活感があまりない。飢餓感もないので、「とりあえず、どこかに行っておくわ。」と、その時はあまり職業や、専門職に縛られないところへ行くというのが、今の実態だと思う。

私が申し上げたいことは、例えば家庭科の中でこれまで指導されてきた縫製技術的なものや調理・食物的なものが本当にいらぬのかということである。専門職で就職するというのは極めて少なくなっているが、先ほど委員長がおっしゃったように、関連の進学を考えると4割強ということで、比較的受け皿があると見ている。それから、今どきの子ども達の手先が器用ではないので、こういった分野を将来の職業教育の中の、基礎教育という形で位置付けていくのも良いのではないかと考えている。

SDGsは2030年までの目標だが、SDGsの目標を叶えるという観点から見ても、子どもにこういった分野の職業教育をすることも必要と思っている。(家庭科の)地図を見ると、呉東と呉西に合わせて3ヶ所あり、普通科が併設された形にはなっているが、時代とともに、今のSDGsのような視点を入れたような中身を少し塗り変えることを通して、もう少し持続させることが良いのではないかと考えている。

とりわけ、ここに置いてあるような地域の小学校、中学校の数が人口とともに減っていく中で、高校もどんどん減らす、減っていくとなった時に、地域を誰が支えていくのかと考えると、例えば看護や福祉の分野を合わせると、もう少しその魅力を伝えながら残していくという方向性が、地域との関連においても大事であると考えている。

稼ぐことが自分たちにとって、あまり切迫した問題でもない。そういう子ども達に、職業科を選ぶことは大変酷であると思うが、卒業してすぐではなくて、大学進学を含めた基礎的な教育を授けるといった位置付けにおいても、ある程度の専門学科を当面残しておく

ことが必要と考えている。本当ならば、次回の普通科の時に申し上げたいと思っていたが、今日は専門教育内容として、残しておくべき分野が少しあると、私としては訴えたいと思っている。

(委員)

どこまでお話できるかわからないが、看護科、福祉科について。

福祉科は少し感じが違うが、看護科は国家資格を取れることから、もう他に選択肢がない、方向性が極めて明確なので、この関連就職率においては、全くもって問題ないというか、もうむしろもう少し数を増やしてほしい。県立大のところにもあるし、富山大学医学部の中にも、看護師を育てるところあるが、やはり看護は今後のコロナの現状から考えると、どのように効率的に人を割り当てるかという問題もあるが、人数をもう少し増加させるということは厚生労働省の指針になっているので、こちらはもう、県としてもこの辺は、認定委員等の増員や施設を増やすなどの方向性が必要であると思っている。

福祉科の方もこの現状から考えると、福祉人員でどうしても必要という社会的な方向性になっているが、如何せん、福祉人材の方たちの報酬や待遇が改まっていないということもあり、なかなか看護師のように増えているような感じは全くしていないと思う。今後の社会の見方からも変えていくしかないと思うが、福祉科の方についてももう少し社会的地位が高まるような枠組みでのカリキュラム、或いは世界に繋がる、繋がらないに関係なく魅力発信をしていく必要があると思う。

工業科で発言をしたかったので、ここからは工業科の話をさせていただく。

富山はどちらかという二次産業の県なので、工業科の就職率が高く、関連就職率が高いことはもちろん当たり前のことだったが、一方で富山が置き去りにしてきた、完全に置き去りではないが、水産業、農業、あと第三次産業で商業、それらに関しては富山県の100年近い県政の中の方向性通りになったと、結果としての姿であると思っている。

ただ先ほども、関連就職率の話が問題提起として出されて、それに関して問題意識を持つのは非常に重要だと思うし、効率性のところからも大事だと思うが、私は関連以外のところに就職されても全く問題ないと思っている。効率から言ったら問題があるかと思うが、教育は本来、気づきと胸落ちのものだと私は思っている。今学んでいるが、就職しました、全く役に立ちませんでした。ただ、さらに10年20年経ったら、やったことが、例えば、お付き合いしている人がそういう仕事を持っていた時に、その人の言葉が強く伝わることもあるし、別の転職先にそういう職業や仕事があった時に、あの時に聞いていたのはこういうことだったのかと理解できる。教育は20年、30年、人生において、響いてくるものだ。そこで関連就職率についてだけ議論をすることは少し筋違いなのではないかと思っている。ただ、予算というもの、お金というものが絡んでくる世界なので、せっかく教えたのだから、すぐに、卒業して10年以内には何かものになって欲しいという視点ももちろんある。

先ほどあったが、「技能と技術を分けて考えたらどうか。」という、そういう視点もあるし、この視点の基に職業科を普通科よりも下というような考えではなく、別のチャンネルが

あるという視点の中に変えていかななくてはならないと思います。

もう一つ根本的な話として、後から総合的に話す聞くところに関係するかもしれない。生徒数が減っていることはもちろん大分前から認識されていて、30年前から比べると、半分以下になっている。今現在8,000~9,000人台で9,000人切っているぐらいになっている状況下で、大事な子ども達をどうやって育てるかということに、もう少し真剣に考えていかなければならないと思うので、このような会議もあるのだと思う。少ないところに少ない人数をいかにきちんと育てるという発想になると、みんなで力を合わせて取り組まなければならないことだと思う。今回、資料を拝見してご説明を伺って、大体趣旨はわかっているが、資料に私学が入っていない。富山県と隣県を見てみると、福井県は割と私学と一緒に考える県だ。石川県は比較的私学と公立が競争しているようだが、意外と仲がいい。富山県は仲が悪いわけではないが、別立てのように考えている。県のこの資料も、明らかに別立てで考えているので、総合的な取り組みは多分できないのではないかと考えていて、どういうことをするかということもあるが、どういうことをしていかなければならない体制かという観点も、非常に大事であると思った。

どこにも触れていないことだが、生徒数の流出の話がある。中学生が、県外の学校に行っているという流出している中学生と、流入している中学生を引くと大体マイナス400人くらいと、ある資料で伺った。9,000人から見ると、マイナス400人というと結構インパクトがある。それがどこに抜けているのかというと、意外にも通信制高校、インターネット上の仮想空間での高校に行く方もたくさんいて、富山県内の高校に行かないという生徒が結構いるとも聞いている。そういうところも、何で減っているのかということ成り行きではなく、どうしようかという視点が非常に必要であると思った。

大変言いにくいですが、御三家の就職の仕方というか、進学目標というのが、私の時代とあまり変わっていないと聞いていて、要するに帝大系に行くと、できれば東大に行ってほしい、その人数で競い合っているようなことは、もしかして現場の先生はそれほど気にしていないと思うが、そういう人数を報道やマスコミが余りにも人数を報道している。明らかに見方として、職業科の地位を相対的に卑しめていると思う。帝大系優先主義の話は結局、突き詰めていくと頂点の人達を、いかに卒業させるかということにプライドを感じさせるような高校のつくりになっている。そうすると、他の高校の定員はどんどん減っているが、一部の中部高校、富山高校、高岡高校の定員だけは割と維持されている。卒業生としては、非常に安心するが、本当はもう少しパラレルに減らさないと、高校生の質が下がっていく。中部高校ではない御三家の高校の中で、頂点の人達のグループと、全く底辺の人達のグループの格差が本当に広がってきたと聞いている。今日は職業科の話で、少し脱線したが、そういうことが起こりつつあるので、こういう問題に対して向かい合う体制を本当に変えていく、ものの見方を変えていく、指導する先生のもの見方を変えていくことが本当に、いろいろな意味で長期的にもこの職業科への見方がいいのかということを変える意味でも非常に必要と思った。

(委員)

先ほど話に出た 14 歳の挑戦ですが、ちょうど私が中学校で勤務していた平成 13 年から始まった。私自身が平成 14 年に初めて、勤務先の学校で導入された時の主務者として、色々、地域の方や企業の方と打ち合わせをして、それから随分経った。

確かにおっしゃる通り、地元の企業の方と話していると、「14 歳の挑戦を通じて、実は入社してきました。」という話も聞かせていただいた。そういうことを思うと学校教育の中で何ができるかといった時、特に中学生・高校生の多感な時期、いわゆる第 2 の成長と言われている青年期前期が一番瑞々しい時期で自分の可能性に期待しながらも、なかなかうまく行かずにへし折れてしまうこともあるかという時期でもある。ただ、そのような時期だからこそ、将来につながる何か種を植えつける大切な時期ではないかと思っている。

高校教育のあり方について考えた時、それぞれの学科でベースになる基礎や技能を身につけるための科目の学習は専門的に行うべきだとは思っているが、教育課程の中で、例えば普通科高校と、色々な学科の生徒たちが何かこう一つのプロジェクトに挑戦するような取り組みはできないだろうか。フィールドに、例えば企業をお借りする場合もあるかもしれない、大学をお借りする場合もあるかもしれない、それからどこかの学校でということも考えられる。今は県立高校でも一人一台端末が入っていて、活用が進んでいる。対面が一番良いと思うが、ただ、ある部分では、それらの技術をうまく活用して、距離と時間と空間を稼ぐような取り組みもできる環境がある。

ものを作ることひとつにしても、例えば、農業高校の生徒は、農業栽培の育成、育苗する技能や知識には非常に詳しくて、課題研究として色々な学びをしている。高校で農業祭など色々されるが、商品開発のベースは何かというと、マーケティングとか、地域のニーズとか。そういったところとなると商業高校の生徒は、それらをよく勉強して理解を深めている。例えば、普通科高校であっても集めたデータを分析して、色々なものにまとめるという力のある生徒がいるかもしれない。今進めている課題研究や、色々民間でやってくださっている〇〇チャレンジとかいうそういうイベントであってもいいのかもしれない。そういうところや教育課程の外も含めて、学校や学科を超えた合同プロジェクトチームを組んでいくような実践も広がっていけば、先ほどからお話のように、例えば起業家精神の育成につながるのではないか。それから起業すると言っても、一人でしなきゃいけない世の中じゃないと思っているので、困った時には「こういう知恵と知識持っているのは、どういった仕事をしている人達の中にいるぞ。」という種を植えておくことも大事だと思う。

大学を卒業される、或いは就職をされて 10 年 20 年経った時に、もしかすると中高校生時代のいろいろなネットワーク、それが強い人脈になって、将来の富山や地域を支えていくような、すごく強い繋がりになる可能性もあるのではないかと思う。そのようなことをしていくことは非常に簡単ではないのかもしれないが、できる素地を持っている学科や高校はあると思うので、少しずつチャレンジし、そして横展開していくという考え方もあって良いと思う。私の場合は、主に学校教育というと義務教育を中心に関わっているが、14 歳の挑戦を経ている中学校 3 年生あたりと高校生とも、うまく結びつきを持たせること

ができれば、中高の繋がりもより深まると思う。

将来について、中学校の教員も、高校の先生も、保護者の方も、子ども達も一緒に語り合うようなことが、富山らしさとしてあっても良いのかなと、そのようなことを思いながら、皆さんの話を聞かせていただいた。

(委員長)

全般の話と個別の話が行ったり来たりする方が、色々な議論、そしてまた思考もインスパイアされると思うので、非常に意義あるご意見を皆様からいただいた。

残った時間、最後にまた全体のお話に戻らせていただく前に、今日ご欠席のお三方から総論について、ご意見があるそうなので事務局からご紹介をお願いします。

(委員)

少子化の中、いわゆる進学校の募集人数を維持していることで広き門となっている。そのため、生徒が学力以上の高校を選択する傾向がある。進学校の募集人員を実態に合わせて減らすことで自分の将来をしっかりと見据えた高校選択となるようにすべきである。現在のメディア等で商工業系専門学科の魅力が紹介されているが、もっと活発にしたり、タブレットを使って道具等で自由に見られるようにしたりして欲しい。

中学生の意識調査を実施し、進学校、普通科、職業系専門学科への進学希望状況や将来の夢などを把握したらどうか。その結果を踏まえて、今後のあり方を検討したい。高校生の意識調査を実施し、高校進学に対してどんな観点で志望校を決めたか、中学3年生に対してアドバイスしたいことなどを聞いて欲しい。上記の調査結果を踏まえて、小中学校におけるキャリア教育のあり方の参考にしたい。

(委員)

ここ30年で情報の送受信の手段は多様化し、またインターネットの活用で生徒が受け取れる情報は激増した。高校進学にせよ、高校卒業後の進路にせよ、生徒の選択に対するこれらの情報の影響は無視できないものとなっていくと感じる。一方で、両親や先生など、身近な存在の意見が彼らの選択を左右する最も重要な因子の一つであることも変わらないだろう。

卒業生の進路状況を示す資料では、その学科並びに関連分野に対する生徒の意識が一部あらわれているように感じた。関連就職率が低くても、例えば商業科においては、進学率が高く、そのうちの半分が関連進学をしていることから、より高度な知識をつけ、関連分野に進みたいという卒業生の前向きな姿勢が伺える。一方で関連就職率が低く、進学先も在籍学科と関連の薄い分野の比率が高い学科は、卒業生が進路変更を目的に進学している可能性もあり、専門学科、そして関連分野の興味や魅力を伝えるための一層の工夫が必要かと思う。また関連就職率が低い場合でも中学生の志願倍率が他と比べて低い学科と、志願倍率は他の方と同程度である学科では、また対応が異なるように思う。

高校の教育にIoTやDXといったように、技術革新に繋がる新しい要素を取り入れるこ

とはもちろん重要だが、生徒たちが社会に出た時にそれを活用できる環境にあるのか、どう活用していけるだろうかという希望やイメージを持てるのかという点も重要かと思う。せっかく学んだことが関連就職先で活かせないと感じてしまえば、他の分野に目を向けてしまう生徒も増えるだろう、情報の量については前半で述べたが、ここで情報の確かさと、それを誰に届けるのかが重要となってくると思う。生徒は大量の情報の中で一つ一つの情報の出し方を判断することが難しくなっている。根拠のある分かりやすい情報を、生徒と保護者にしっかりと届けていくことで、職業系専門学科の役割や特徴を正しく伝え、各学科の魅力を伸ばしていくことにも繋がると思う。OB、OGによるロールモデルの紹介など、生徒が高校卒業後の自分の姿をイメージできる情報提供や、教育プログラムを提供することも重要かと思う。このあたりは高校の努力だけでできることではないので、自治体や地元企業の理解に基づいたサポートや連携が必要だと思う。

もう一点。生徒の人数が減ると、必然的にクラスの数も減ることになるので、もともとクラス数の少ない職業系専門学科については、県内の各地域にすべての学科をそろえることが難しくなってくる。将来、生徒の人数がさらに減少し、極端な例だが、県内に一クラスずつしか専門学科を設置できないような状況となった場合、共通の科目を近隣にある複数の異なる学科が合同で授業を実施する可能性について、そのメリット・デメリットを検討する時期に近づきつつあるのかもしれない。どの教科書を使って教育するかなど、課題などを検討する必要はあるが、異分野交流の機会と捉えると、思わぬメリットも生まれてくるかもしれない。また、コロナ禍の中、オンライン授業への対応が各学校でも一気に進んだ。もちろん、基本的には対面の講義が前提となると思うが、オンライン授業もうまく使えば、大きな教育効果を生むと思う。せっかく新しい環境を整えられたので、オンラインでの教育を利用する仕組みづくりも進めていただけたらと思う。

(委員)

一点目、現行の職業学校の問題点や課題については学校評価等において明示されていると思うので、学校評価等を有効に活用し、学校の課題で特化すべきこと、教育内容などを生徒や先生に聞いてみても良いのではないかと。専門学科区分ごとに分析してはどうか。課題を克服していくためには課題をはっきりさせなければいけない。抽象的ではなく、具体的に考えて考えなければならないのではないかと。

二点目、学校設置時の主旨、教育目標があるはずである。各学科でなかなか定員が充足しないといった近年の流れ、生徒の進路等の実態調査を分析してそれを改善することは、県財政負担を抑制することにも繋がり重要である。学区によっては常に未充足傾向にある学校が散見されている。

三点目、学区ごとに各学科があるが、このままでは小さくなって、廃れていくので各学科をまとめて大きく集約する方法を考えてはどうか。少子化人口構造の中、ある程度の生徒数をまとめないとクラス運営は困難であり、コストバランスも悪くなる。地域性を重要視することが必須であり、通学距離、通学時間の時間短縮といった、交通の利便性も視野に踏まえながら集約する。

四点目、職業系専門学科のあり方を考える時、各学科のくくりで、今までと同じ形態で変えていくのではなく、全体を変えてどうブラッシュアップしていくのか、考えなくてはいけないのではないか。例えば、ものづくり富山県の地域産業の目指す目標や、その担い手の育成を考えると、具体的な学科の設定は、やはり地元の経済産業界との連携が重要であると考え、高校卒業後の出口は大変重要である。進路を決めるにあたり、しっかりと将来の夢や希望が設計できるような選択肢として働きたい、働いてみたい企業とつなげていくことはとても大切である。

(委員長)

それでは、また皆様からご意見いただきたいと思うが、個人的に一言だけ。

数年前にある団体で農業の勉強したことがある。私が携わったわけではなく、そこである方の意見を聞いた。世界第2位の農業輸出国はオランダだ。オランダに農業系の大学は、有名なワゲニンゲン大学しかない。そちらに完全に集約されている。ところが、日本はもともと明治の最初から、江戸からほとんど農業だったので、農業系の学部なども結構全国にもばらばらにある。オランダは小さい国ということもあるが、すべての農業系はワゲニンゲン大学に集約しているので、世界最高レベルの農業関係の取り組みをしている。

日本は、農学部のシステムでもまだたくさん残っている。全国に国立大学、公立大学、石川県立大学はもともと農業高校だったと思う。だから、集約して、特に今、人口が減って、複数の方のだんだん減ってという今のご意見の中で、どうしていくのかという時に、これまでの体制を維持しようとする方が楽だが、ただそれだとどうなのかと思う。特に職業科については、高校であれば通えるので、思い切って集約、地域の反対もあるだろうが、先端のものを教えていくということも考える必要がある。たまたまだが、日本は農学部が全国にばらまかれていて、農業関係の学部の教授の数とかものすごく多い。多い割に、いつの間にか農業がどんどん衰退している。オランダのワゲニンゲン大学という世界的に有名なところも集約されていて、次々に成果を生み出して、農業輸出でいうと世界第2位だ。あとはそういうことをやはり学ばなければならないと私自身は思っている。従来の形を維持したまま、人口が減って、子供たちが減っていくと、どうしても歪みが大きくなってしまふ。それは職業科についても、特に言えると感じる。

(委員)

今の意見の補足になるが、今回の中教審の答申で、各高校はスクールミッションとスクールポリシーを明らかにしなければならなくなっている。

例えば、その農業科、水産科、それから家庭科の関連先の就職率10%前後の方向で、校長先生以下、教職員の皆さんはどうやってスクールポリシーを作成するのかということも、実は考えなければいけない。つまり、その職業科に行った子ども達の進路選択と同じぐらい、その職業科の先生方は自分の学校でどんな生徒を輩出するのかといった具体的なイメージを持たなければ、それを出せなくなってしまう。それでもデータが示すようにその関連就職が10%前後だとするとそれは、ある意味、そこでの役割があるのかなのかという

話になると思う。

だから、今ほどおっしゃったように、ここは思い切ることも必要ではないかと思う。今の普職比率が問題になってくると思うが、普通科で十分学べることはたくさんある。私の娘が普通科高校を出て、生活環境学部に進学した。それは十分に普通科に行っても、その家庭科で学ぶような内容のところへ進学できているわけなので、そういった意味ではこの職業科というくくりは、それほど私はこれからこだわる必要はないのではないかと思っているし、ましてや商業科を出た子ども達が、商業科を出たからどこに就職するのか決められるかと言ったら、別に決められないわけで、まさに商業全般、いわゆるサービス業務全般に関わるところに行くとするれば、それは全くその学科の特色ということを書えなくなると思う。その辺は今回のせっかくの機会なので、もう少し大胆に学科の見直しを提案したいと思う。

(委員)

皆さんのお話を聞いて、同じことを思っていた。

一つは、起業家、農業や水産を学びたい人が多いが、出る時に就く人が少ないことは業界の課題だが、就職先が少ないから農業イコール自営・起業になる。私は継いでいるが、自営をしている。

この情報ともう一つ、看護科は目的がとてもはっきりしていて、国家資格を取って、要は目的と成果が、大変明確だから必ずここに行ったら100%、素晴らしいと思った。農業の種はたくさん撒いておきたい。だから普通科において、農業に触れる機会を必ず作って欲しいが、もしかして農業高校に至っては、最初に大前提に、起業、自分で仕事をする、農業は目の前の田んぼ、田畑をどうデザインしたり、何を売ったりしていくかを考えて行く。そうすると自分でやってみたいという人が就職して、会社で困ることはないと思う。そういう人が育てて欲しいので、いろいろな種を撒いておきたい。農業科についてはもしかすると、この農業界に入る人は最後の出口、就職、もしくは自分で自営することを前提にした学びがあることや、与えることを明確にして人材を募っていく、学びたいとか、あるから選べるとか、何となくではなくても、ここで学びたいというその心を、看護科がちょうど足りないという話があったが、もっと増やして欲しいぐらいというように、普通科でたくさん種を撒きつつ、富山県のここで勉強すれば、起業もできるし、就職や他のビジネス、必ず起業するには全部のノウハウを学ばなければならないので、そういうように特化しても良いと思った。

(委員)

実際の生徒数の変化として、半分くらいになっているのに、高校はまだ7割くらい残っていると現状を考えると、ある種、整理しないといけないだろうとは思う。

ただ、先ほど申し上げたかったのは、富山は工業がすごく盛んで、生活関連産業も多いので、その基本的なところを学ぶ分野は残しておく必要があるだろう。ただ、それが大変だろうとすれば、新しい高校のあり方として、普通科の中で、別の学科がつくられるとい

うのも、今度からできるようなので、そういう形でバランスを考えていただくということがこれからの議論になろうかなと思う。誤解のないように、少なくなるから、もう廃止のような極論だけは避けていただきたいと思います。

先ほど本質的な話もあったので、私も大変共感しているところだ。

それから、農業高校については本当に私もよく取り組んでいると思うので、何とか工夫してこの分野を残して欲しいと強く思っている。

(委員長)

そろそろ時間も近づいて参ったので、ここで、教育長から一言いただければと思う。

(教育長)

本日は本当にたくさんのご意見を頂戴し、本当に感謝申し上げます。どのご意見もなるほどと、うなづく意見ばかりで参考にさせていただきたいと思う。

特に学校で学ぶことと実際に社会に出たことが、どれだけリンクしているのかという投げかけを頂戴した。やはりこれだけ社会、産業の変化のスピードが速いと、なかなか学校で学んだことが、そのままビビッドに生きるということが、難しくなっている部分もあると思う。学校でのカリキュラム、今はスクールポリシー、スクールミッションといったことの見直しをちょうどする時期だということもあるが、そういった各学校での検討の中でも、どういった生徒を育てるかそのためにどういった学びにするのかということを実際に考える時期にもあるので、今後の学科のあり方というものを、こういった場で私ども検討もさせていただいているが、学校でも本当真剣に検討してもらいたいと思っている。

二点目として、いろいろな交流、他の学科と交流するとか、あと世界と繋がる、世界とどう繋がるかということを知るとかそういったスケールの大きなご意見も頂戴した。そういった視点で教育を考える、また実際に取り組んでいることをもっともって世の中に知っていただく、良いこともたくさんしていると思うのでご評価の声をいただいたので、もっと発信していくということも非常に重要と思って拝聴していた。

それと関連就職、関連進学の関係のご指摘もいただいた。学科の存在意義がどうかというご指摘、それも一方で大変重い視点、ご指摘だと思うが、一方で、あまりその直接的な短期的なことだけではなくて、少し長い目で見るというのも大事ではないかというご意見も頂戴した。進学なども踏まえた上で、ある程度の基礎的な専門的な教育というような視点で、職業学科を考えるということも有効ではないかといったご指摘にも、なるほど思ってお聞きをしていた次第である。

今回の検討会、2回目ということで、まだまだ先が長いですが、検討会の目的は、変化の読めない予測困難な時代を生き抜くための子ども達の能力をどう育むかということ、地域を支える人材をどう育成するのか、そういったようなことを開会の時に申し上げた。

また、先ほどご紹介もあったが、今、富山県の成長戦略の検討というのもされている。その目的というのが一人一人の真の幸せ、ウェルビーイング、これを実現するということ

を考えていこうという戦略にもなっている。そういった戦略とも、このあり方というの、大いに関係があるのだろうと思っている。

今回は、普通科、その他、新しいタイプの高校などの議論、またその先、来年度も引き続き色々、関係の方へ意見を聞き、そういったことも考えてみたいと思っている。長丁場になるが、どうか今後ともよろしくお願ひしたいと思っている。

(委員長)

最後に皆様のご意見をお聞きして、私の知っていることを二、三申し上げたいと思う。

富山国際学園の理事長を務めているが、例えば国ごとに教育システムはかなり違う。ヨーロッパは先ほど、技能者・技術者についてもあったが、結構、階級社会なので、ドイツはもう10歳ちょっとで、道が分かれる。逆にそれが反省で、だんだん日本型に近づいているようだが、日本は見かけ上はものすごくフレキシブルで、教育はどこからでも学べる。ただ実態は、閉塞感に包まれていて、途中で進路を変えることがまるでこうタブーのようにされていることがあると思う。

それから、大昔を考えれば、小学校しかなかった。本当に一部の方だけが高等教育に進まれた。今はもう、完全に知的なもの、知的社会になりつつあるので、ベースが昔よりはたくさんを知っていないと社会で活躍できない時代になってきていると思う。それなのに農業科や水産科、高校の段階で、従来の、昔の社会のレベルが低かった時の区分けでそのまま、物事が進んでいることはいかかなものであるのかと個人的には思っている。

例えば、日本標準産業分類、総務省かどこかがまとめて、細かく産業分類すると多分1,000以上ある。ただ農業と言っても、6次産業もある。それで従来のカリキュラムがおそらくいつごろ決められたのか知らないが、多分古いカリキュラムのものの考え方がそのまま20年30年残っているのではないかと思う。それだと、現在のIT社会の中で付加価値を生み出すような職業科のあり方を私は模索できないと思う。

そういう意味ではもっと、ものすごくたくさん、細かくしていくと職業分類はあるが、一つ一つ極めていくことは大変だ。もっと、例えば農業でも水産でも工業でも、そのベースのカリキュラムは本当に何だろうと。あとは申し訳ないが、大企業は独自でやってくださいと、中小企業の皆さんはどこか、業界団体が集まって、教育をしてくださいということで、底上げをしてくようなことを考えないと、昔の、高校からすぐ「はい、就職。」というようなイメージのまま、職業科のカリキュラムがそのまま維持されているのではないか、これは全く私の推測なので、間違っていたら申し訳ない。それでは、いけないのではないかと思う。

もう世の中が変わってきているので、昔からの教育システムこれも、もちろん文科省のご指示もあるだろうが、ただ文科省が一番力を発揮するのは義務教育だ。高校はもうすでに義務教育ではないので、恐らくは教育委員会の皆さんがもう少し主体性を発揮して取り組むことも、私はできると思う。

先ほど議論があり、私学との関係もあるし、教育委員会は、県の関係の仕事だけというものの方で本当にいいのかという大きな問題提起もあった、進学校の定員だけどうして

減っていないのか、私も不思議に思う。正直、これだけ子どもが減っているが、なぜ富山高校、高岡高校、富山中部高校だけ7学級もあるのかと正直不思議に思う。そういう矛盾をたくさん抱えながらも、世の中が変わってきているので、大昔に作られた規範をそのまま維持しようという形だと実際に、職業科で学ぶ、若い子ども達が不幸になる可能性もあるということを最も危惧している。

本当に今日は2時間あまり、本当に忌憚のないご意見いただき、感謝申し上げます。これで委員会を終了させていただいて事務局の方にお戻ししたい。

4 会議の要旨

15時00分、議事が終了したので、委員長が終了を宣し、進行を戻した。その後、司会が閉会を宣した。